

ミへの歴史と内なる“歴史”：研究ノート， Apuntes sobre la Historia de los Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, Mexico後記

著者	黒田 悦子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	3
号	3
ページ	557-571
発行年	1979-01-23
URL	http://doi.org/10.15021/00004578

ミへの歴史と内なる「歴史」

—研究ノート, Apuntes sobre la Historia de los
Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, México 後記—

黒 田 悦 子*

The History of the Highland Mixe: Outside View and Inside View
—A Postscript to Apuntes sobre la Historia de los
Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, México—

Etsuko KURODA

A reconstruction of the highland Mixe history is presented by the author in “Apuntes sobre la Historia de los Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, México” [KURODA 1976: 344–356]. The Mixe history delineated there is no more than a brief review based on a few sketchy references from non-Mixe observers, extending from the post-Conquest years through the colonial period to the 20th century. What is needed is a view of the Mixe history seen through Mixe eyes. Nathan Wachtel, in his discussion of the Spanish Conquest of Peru through Indian eyes [WACHTEL 1977], shed light on the inside view of the vanquished through analyzing *la Danza de la Conquista*. *La Danza de la Conquista* performed in the Mixe highlands lacks speeches. The text of *la Danza de la Conquista* from San Pedro Ocotepéc, a village in the Mixe midlands (collected by P. Octavio Vilches, a Salesian), is a mere reproduction of the conquest theme, showing no transformation by Mixe imagination. A clue to the Mixe inside view is found in the folktales of their culture hero called the *Rey Kondoy*. Contrary to historical facts, he defends the Mixe against the Aztec, the Spaniards and the Zapotec. He is an incarnation of the image of the Invincible Mixe. Here in the folktales of the *Rey Kondoy*, we find a glimpse of the inside view of the Mixe history.

For writing this short note, I am much indebted to the Salesians of the Mixe bishopric who generously allowed me to use the manuscript of the dance.

* 国立民族学博物館第4研究部

- | | |
|------------------|-----------------|
| I. はじめに | 1. 「征服のダンス」を通じて |
| II. 歴史資料の検討 | 2. 文化英雄を通じて |
| III. 内なる“歴史”を求めて | V. おわりに |

I. はじめに

ある一つの民族の中に身を置くフィールド・ワーカーは、歴史にたいして二つの視点をあわせもってくらしている。その民族の属している文明、歴史、国家の全体の流れに、その民族を位置づけようとする試みと、民族の内なる視点から、上にかぶさる大きな社会や歴史をみようとする試みである。第一の視点は、いわば機能主義的な、説明のためのもので、第二の視点を正確で動的にするための予備的段階ともいえる。第二の視点は、民族や研究者のコミットメントにかかわるものであって、その前提として、正確な資料が必要になるからである。第一、第二のいずれの視点をかためるにあたって、研究者は資料不足に悩まされる。私達のかかわる社会の大半は“未開”社会か民俗社会であって、歴史についての資料は極めて少ないか、あったとしても、なかなか入手が困難なためである。

現在、メキシコのインディヘナの種族は50ほどあるが、いずれのグループを扱う研究者も歴史資料の僅少さにもどかしさを感じつつフィールドを去っている。マヤ、アステカ、トラスカラ、タラスカン、ミステカなどの著名なインディヘナの社会のエスノ・ヒストリーの豊富さは別として、その他の民族の歴史を再構成しようとする時、知りうることは極めて限られている。

だからといって、それがインディヘナの社会の歴史の浅さを示すことには決してならない。彼等の歴史はあったにもかかわらず、書かれなかったのであるし、また、書かれるようにと世界の歴史が動かなかっただけであった。書かれなかったが故に、その空白の故にこそ、その暗闇の部分の時の流れのもっている文明社会へのメッセージには測り知れない重要なものがあるにちがいない。今もって、人類学者が書かれなかった歴史の人々に執着するのは、彼等の現在の社会と文化の中に過去も現在も凝縮されて存在しているからではないだろうか。

私はミへの村々を旅している時、歴史を感じ、歴史をみた、と思えるようなことが何回かあった。それは、必ずしも歴史の実体を感じさせる建造物とか物体に触れた折とは限らなかった。その種のことなら、アロテペックやアティトランの村でもっと明白に歴史を感じたはずであった。アロテペックは中部ミへの山岳地帯にある。エスタ

ンシァ・デ・モロレスから、セロ・デ・マリンチェという山の横腹をほうようにして4時間程歩くと、忽然と、植民地時代の教会の姿が現われ、狭い平面にへばりつくようにして民家が並んでいた。教会は広大な中庭を備え、伽藍の中には、50余りの古風な聖人像が並び、聖壇の背後はバロック風にしつらえられ、壁面は全面に絵がほどこされていた。これを見た時はじめて、ミヘ山岳地帯における18世紀のドミニコ派の黄金時代といわれるものがどのようなものであったか、を私は感じる事ができた。同じような感慨はアティトランの教会を見た時にもえられた。しかし、この種の感慨は見られうる歴史の足跡に触れることからくる喜び、説明しうる、手の届きうる歴史に触れた喜びの部類に入る、と思われる。

私が、もっと深く歴史を感じたのはミスストラン村の空間であった。高地ミへのこの村は、村と呼ぶほどの人家のまとまりもなく、教会がやっとおさまるプラサの下には急な斜面が続き、人家が2、3軒見えるにすぎない。プラサの上の急な坂を登ると墓地が続き、さらに、野草をかきわけて登ると、低い窪みにぶつかり、最近の死者の副葬品らしく、女物の青いブラウスに洗いざらして色の失せた巻きスカートが置いてあるのがみえた。ミスストランの女がいつも肩にしているイストレ製の袋も、小さな靴型の土器も見えた。ここから右に折れると、供犠の場があり、七面鳥の羽根が散らばっていた。ここから坂を下り、サポテカ族の石工が招かれて建てたといわれるムニシピオの部厚い円柱の間を歩いてプラサに戻り、教会の屋根をみおろす高さの斜面に建てられたマヨルドーモの宿舎の前に座ってプラサを見渡した時、私は、自分が確実に歴史の空間ともよぶべきものの中に座していることを感じた。

センポアルテペツル山を背景に青空が広がり、2、3本みえる高い木の下でミスストランの女が数人テパッチェの壺を抱えるようにして座っている。赤い頭飾りが濃紺の衣裳に映えている。教会の正面では「征服のダンス」(コンキスタのダンス)の踊り手がフルートと太鼓に合わせてステップを踏んでいる。上の坂道から2、3人が降りてくる。見ると、トラウィとアユトラの村の市に向うヤララの革サンダル売りであった。陽がかげりはじめた中をコンキスタのダンスはまだ続いている。

Natividad Chica と Grande の二つの祭りが明日から続くので、奉納の舞いも長びくのであった。単調なリズムが聞えなくなった時は、もう夕闇がプラサを包んでいた。ミスストラン村の人々はいったい何時から、選りにもよってこの急斜面に村をかまえたのだろうか。レドゥクシオン (reducción) とは何であったのか。征服文化とは何であったのだろうか。宣教とは何であったのだろうか。色々な問いが私の心におこってきた。老女が一人、マヨルドーモの台所を訪れる音がして、私の問いは中断された。

イサベラは祭りのマドリーナだから、私も明日、祭りを見物させてもらう旨を伝えておかねばならなかった。

あの折に中断された思いに今たち戻って、ミへの歴史への接近の仕方について、ここに記してみたいと思う。ミへの歴史の概観は研究ノート、*Apuntes sobre la Historia de los Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, México* [KURODA 1976: 344-356] にまとめたが、ここでは、そこで使われた資料の検討を通じて、一体どの程度ミへの歴史がわかるのか、という問題を考え、ついで、ミへの側からみた内なる“歴史”はいかなる現われ方をしているのか、という二点につき書き足してみたいと思う。私がここで扱うのはミへの資料に限られているが、メソ・アメリカニストに共通の問題に触れようとしている。

Ⅱ. 歴史資料の検討

高地ミへの歴史について前述の研究ノートをスペイン語で発表したのは、現地の関係者から追加事項や誤りを指摘してもらうためであった。現に、2, 3の疑問点が指摘され、また、私の方からも、その後の読書を通じて、いくつかの修正すべき点に気づくようになった。しかし、覚書の大筋に変化はなく、追加できる資料も多くはなかった。ただ、将来、1930年代から40年代にかけて活躍したサカテペック村のカシーケ、Luis Rodríguez について新しい資料が加えられるだろう、という情報がアロテペック村の宣教師から届いた。¹⁾

結局、僅か8枚の覚書以上に高地ミへの歴史がふくらまないというのが現実で、これが歴史上に大きな足跡を残さなかった無名のインディエナのグループを扱う際の共通の現象であろう、と思われる。しかも、こうして、つぎはぎにされた歴史がどれだけミへのたどった歴史の本質に触れるものかを考えると、それは無に等しい。以下に、各時代にどのような資料が得られ、資料としてどの程度役立つのかを考えて、前述の研究ノートへの反省としてみよう。

ミへの起源については Beals の熱帯雨林起源論があるが [BEALS 1945: 11]、この仮説が実証されたところで、ミヘが Maya-Zoque グループに属すること以上の事実が出てきそうにもない。また、ミヘがペルー由来の民族であると、フランスの旅行者 Guillemand がのべているが [DE LAMEIRAS 1973: 134]、これは、19世紀ロマンティズムの影響により“インディオ”の存在を神秘的に美化する傾向にとらわれた書き物なので、資料として余り役に立たない。ミヘに限らず、メキシコのインディエ

1) [LAVIADA 1978] がそれであった。

ナのグループに関する外部からの19世紀の資料は注意して扱う必要がある。

ミへに考古学遺跡があるわけでもないので、コルテス以前の歴史については何もわかりそうにない。この時代を知るために他の資料はないかと考えた私は、各村の起源説話を思い浮べてみた。いくつかの村の説話を調べて、せめて高地ミへの移動の方向だけでも出してみようと試みたが、徒労に終わった。村の起源説話には、山岳地に居住地を求める苦勞がカトリックのシンボリズムで表現されたものが多く、それはそれで興味深いものであるが、具体的な時の流れの再構成に役立つものではなかった。スペイン以前の資料の多いマヤ圏であれば、このような試みも想像以上に成功するだろう。考古学、歴史学、民族学の協同作業が成功している例にあうと (e. g. [JONES 1977]), そのように思える。

アステカの時代に、アステカ勢はオアハカを通過してグアテマラにまでむかった。こうして、アステカの文化的影響はオアハカ平野のサポテカ族にまでおよんだ [TAYLOR 1972: 22, 202]。しかし、アステカの軍勢がミへ高地に侵入したという記録はなく、オアハカ平野からの遠さ、山岳の険しさからみて、アステカはミへ高地に入らなかった、と判断しても、アステカの文化的影響がどの程度入ってきたか、という問いが残る。1960年代から70年代になってはじめて、高地ミへの村の一部に道路が開通し、ミへは直接オアハカ市に接するようになったが、それまでは、文明は常にサポテカ族を経由して入ってきた。このパターンは昔からのものであり、何かアステカ的なものが入っても、それはサポテカを通じて入り、アステカかサポテカか不明な形で入ったに違いない。しかし、具体的に何が入ったかを知る資料もない。

人類学を学ぶものは、まず、アステカとかマヤとかいった考古学の世界に圧倒されるが、現在のインディヘナの社会を扱うにあたっては、スペイン以降の歴史の方が重要なのではないかと私は思っていた。この考えは、メキシコに着いて、インディヘナの村にいらして、そして町に戻ってくる度毎に確定的になった。現に、インディヘナ社会の形成にあたっての植民地時代の影響の重要性は多くの歴史家の指摘するところである (e. g. [MIRANDA 1972; MÓRNER 1973])。

ミへの歴史のなかで、なにがしかの文書記録があるのは植民地時代である。行政面と教会からの資料が散発的にはあるが得られる。しかし、これらの資料は外部からの、支配層からの資料であって、空間的にも距離的にも隔たりがあり、いざ、ミへの生活はどうであったかと考えると、なにもわからない。

コルテスが *Cartas de Relación* に残した荒荒しいミへ山岳地帯、難攻不落のミへ、周辺民族への襲撃を好むミへという報告は [CORTÉS 1971: 194–195], 高地サポテ

カヤ、ヴィリア・アルタに配属されたスペイン軍司令部を通じて入った知識に基づいている。ミヘと敵対関係にあったサポテカからの情報なので、ミヘは専ら悪役を演じている。この“難攻不落”のミヘというイメージは今世紀にまでもちこされ、メキシコ市の人々のミヘについての印象になっている。

サポテカと同盟してヴィリア・アルタに駐屯したスペイン軍(トラスカラ, アステカを含む)とミヘの戦いについては専らスペイン側の資料にたよるしかないが, Pérez García に発見され 1956年に出版された, ヴィリア・アルタ連合法廷の古文書の類 [NADER 1969: 334] がこれからも発見されれば, この当時のスペイン軍, サポテカ, ミヘの抗争の様子が明らかになるだろう。それにしても, それは, サポテカ側の記録であって, ミヘの側からの発言が闇にほうむられていることには間違いない。

植民地時代を通じて, 行政面からの記録は貧弱をきわめている。資源もないミヘ山岳地が搾取の対象にならなかったために, 植民地政府の関心も低く, 徴税を目的に綿密な記録をとったペルーの例や人口統計を忘れなかったメキシコ中央高原のケースと全く異なった状況であった。この期の唯一の文書は1712年に発行された高地ミヘ5カ村の土地認定書であって, 現在は Archivo General de la Nación に所蔵されている。この文書には, 各村の公共建造物(ムニシピオ, 牢, 教会, 墓地)の設立年代が数字となって記録されているが, この数字を読み合わせると, 矛盾が多く, 資料として役に立ちそうにない。1712年に植民地政府がミヘの村の土地所有を一応認定した, ということがわかるだけである [ARCHIVO GENERAL DE LA NACIÓN 1973]。1970年代になって, ミヘの村々が現メキシコ政権下による土地の再認定を実現するにあたって, 既存の権利を主張するための唯一の歴史文書は1712年の文書だけであって, ミヘの立場の弱さがうかがい知れる。

宣教師のくりひろげる宗教上の征服については批判はたえず, 現今のメキシコではおおよそ人類学徒なるものは反教会の立場を強いられる。もちろん, 志向性からいえば, 人類学者が教会に加担できないのは明らかであるが, 官庁や政府筋の人類学者の余りにも早計な発展政策への加担, さらに, インディオ社会へのコミットメントの僅少さの故に, この種の研究者とかならずしも同調できない。イデオロギーは別として(ここが, 本当はむつかしいのだが), コミットメントのレベルの高さの故に, 私達が教会関係者から学ぶことが多くある。ミヘの歴史の叙述にしても, 行政側の記録にくらべて教会側からの記録は読みが深く, また, 時として, かけがえのない民族誌的記録となっている。

宣教師側からの最初の資料として Motolinía のミヘへの言及があるが [MOTOLINÍA

1969: 91], この情報源はドミニコ派であろう。Motolinía の場合、その個人史を反映して、彼が12使徒として住んだウェホチンゴ近く、つまり Cholula やトラスカラ方面についての記録は精彩をはなっているが、他の地域についての記録は貧弱である。ミへの言及もその例外ではない。

次に、18世紀から19世紀にかけての教会側の資料として *Libro de Cordilleras* と名づけられたものがある。cordillera は山の意ではなく、メッセージという意味に使われており、オアハカ市のサント・ドミンゴ教会に座したドミニコ派の司教から教区を中心であった村にのみ送られた。私は、フキーラ村とトラウィ村で *Cordilleras* をみる事ができた。フキーラには3, 4冊あったが、旅先のこととて借り出すことも転写することもできなかった。トラウィに所蔵されているのは一冊しかないが、内容をみると、中央からの神父の訪問の知らせ、法王の選挙、殉教者の報告など、専ら神父のためのニュースが多く、ミへの村に関わることといえば、作物の品種の改良、墓地の整備といったことに限られている。それも、項目がでてくるだけで、細かい通達内容が文書として残っているわけではない [トラウィトルテペック教会 1825-1849]。

18世紀の教会側からの資料で敬服すべきは Fray Agustín de Quintana の *Confessionario en Lengua Mixe* [DE QUINTANA 1732] と *Instrucción Christiana y Guía de Ignorantes para el Cielo* である。後者はカトリックの教えをミへ語に訳したもので、内容は宗教者に役立つ。人類学者に興味深いのは前者である。毛皮表紙に納まったこの本を私はトラウィの教会でみる事ができた。著者はミへの告白者を想定して、十戒の順に質問を作り、予想される答えを作り、両方をミへ語に訳している。そこに、同神父が異教と考えたもの、つまり、ミへの供犠の本質やミへの生活・習俗についての質問が次々と出てくる。そこに現われるミへの生活は現今のものと大差があるわけではない。いちいち、もっとも、とうなずける質問ばかりである。また、巻末に載っている語彙集、特に、数と親族名称は表記法こそ異なれ、現今のミへ語に照合できるものであり、フキーラ村で神父をつとめた Fray Agustín de Quintana の中に偉大なる民族学者の志向をうかがうことができる。

1889年に出版された司教 Eulogio Z. Guillow による *Apuntes Históricos* [GUILLOW 1889] はカホーノス・サポテカの村役人が教会を守ろうとして殺害された理由の解明のために書かれたものであるが、この中で民族誌上重要なのはカホーノスとその周辺の村々の宗教についての言及である。ミへについては僅かしか記されていないが、ミシストラ村での偶像の発見、ヤララへの移動、住民の動揺と偶像への愛着、雨乞いとの関連などが生き生きと描かれている。また、チチカステペック、テプステペック

ク、アユトラ村に関する情報も今日の民族誌的事実に一致する。筆者が宗教者であるため、“異教”の側面に触れる時、Fray Agustín de Quintana と同様、筆者の偏見がもろに現われるが、新鮮な驚きと感情移入の多い文章にミへの姿が生き生きと出ている。

19世紀から20世紀にかけての教会史はドミニコ派の神父の Arroyo によって書かれている [ARROYO 1961]。サント・ドミンゴ教会に残る古文書を利用できる点からいうとこの人が適役なので、その著 *Los Dominicos* の宗教色の強すぎる部分をさけながら読みすすむより仕方がない。

19世紀は独立戦争とフランスの干渉戦争の二大事件があり、メキシコ史の流れに多少ともまきこまれたインディヘナ、例えば、高地チャパスのマヤ、オアハカ平野やプエブラ州のインディヘナの村々では、これらの歴史的事実がフォークロアやダンスに影響を与えた。しかし、歴史の大きな流れからとり残されているミへの場合、この時期をしのばせる民族誌上の事実はなにも残っていない。

メキシコ革命時代のミへの指導者、アユトラの Daniel Martínez とサカテペックの Luis Rodríguez については詳細な記録がえられる。前者は Beals がアユトラに調査に入る時の世話役であり、この“カシーケ”については生き生きとした報告を残している。後者については、Nahmad と Laviada の詳しい記録がえられる。メキシコ革命のインディヘナの社会への影響については Ricardo Pozas の *Juan Pérez Jolote* [POZAS 1952] や Michael Kearney の *The Winds of Ixtepeji* [KEARNEY 1972] に触れられているが、他の地域ではどのような影響があったのか、歴史家と協力してまとめてみる必要があると思う。メキシコ革命時から1960年代までの歴史的事件、特に土地をめぐる争いについては、年輩のインフォーマントから教えてもらうことができる。

ミへの“現代史”は1960年代の道路の開通とともに始まり、以来、政治、宗教面に矢継早の変化が起った。これはフィールド・ワークで把握される近年のことであり、エスノグラファーは各章の叙述の中に歴史の断片を書きつづる。後代の研究者はそこに1970年代のミへの実態を見出すこととなるだろう。

Ⅲ．内なる“歴史”を求めて

前章で資料の検討をおこなったが、歴史といっても、結局は、ミへの存在を外から大づかみに捉えたものにすぎないことがわかった。ミへ自身は何の発言もせず沈黙したままである。一体、ミへは自分達の歴史をどのように説明するのであろうか。外

からの、つまりは支配者側からの歴史ではない、内なる「歴史」があるにちがいない。

1. 「征服のダンス」を通じて

征服された民族の側からの歴史への発言をさぐる試みは、León-Portilla の研究をはじめ [LEÓN-PORTILLA 1964]、最近は色々な出版物がでるようになり、一つの流行をなしているようである。そこでは、土語による記録、インディヘナのインフォーマントをもとに書かれた記録、教会の記録、ダンスの台詞などを資料にして、インディヘナ側からの征服という事実への解釈が明らかにされている。残念ながら、ミへのように周辺的な存在のインディヘナは自らの歴史への告白を持っていない。文字を持たなかったし、その歴史を書きとめてくれるクロニスタをえることもなかった。そこで、ダンスの台詞を資料にして、ミへの歴史への発言が有るか否かをみよめる必要はあるようである。

Wachtel の *The Vision of the Vanquished: The Spanish Conquest of Peru through Indian Eyes 1530-1570* はその副題の示すごとく、インディヘナの目からみたペルーの征服をテーマにした書物であるが、ここで目を引くのは「征服のダンス」(コンキスタのダンス)を資料にして被征服民の歴史観を描く試みである。これは、León-Portilla 等によって既に行なわれていることであるが [LEÓN-PORTILLA 1964]、ペルーの例とメソ・アメリカの例との対置の仕方が Wachtel の書物の面白さとなっている。

彼によると、ペルーやボリビアのコンキスタのダンスでは、アタワルパの復活が演じられ、メシアニズムの志向がみられる。チャヤンタ版によると、アタワルパの夢見、インカの将官とアルマグロの会見、アタワルパとピサロの会見、アタワルパの殺害、ピサロの暴挙に対するスペイン王の罰といった順で物語は進む。オルロ版では、インカ側からのアルマグロを追い払う試みが演じられ、アタワルパの死後、インカの復活を祈るコーラスがきかれる。ラ・パス版では、ダンスはアタワルパの復活と勝利で終る。このように、三つの版により、物語の展開や強調される要素に差があるが、共通にメシアニズム志向が見出される。このダンスはペルーやボリビアのインディオの間に今も伝わり、インカの復活の伝説と一脈通じるものである、と Wachtel は考えている [WACHTEL 1977: 34-40]。

メソ・アメリカでコンキスタのダンスが最も発達しているのはグアテマラ高地である。特に、ケツァルテナンゴ、つまり、キチェの王テクム・ウマンとアルバラードが1524年に戦った場所に近い地域には特に精緻なコンキスタのダンスをみることができ

る。ここでは、物語は複雑に進むが、ダンスはキリスト教の賛歌で終り、メシアニズムの要素はみられない。しかし、ここで忘れてならないことは、ダンスの先生がコンキスタのダンスは先祖の抵抗へのはなむけとして踊るのだ、ということを経験している点である。つまり、演じる精神に土着主義への傾斜がみられるのである [WACHTEL 1977: 40-48]。

メキシコの例としてコンキスタのダンスと羽毛のダンス (*danza de la pluma*) があげられている。前者はプエブラ州ヒコテペック (ナワの村) のものであり、1952年に台詞が出版されている。後者はオアハカのモンテ・アルバン近くのクイラパムの有名なダンスで、1900年に台詞が記録されている。ヒコテペックの場合はコルテスの勝利、クイラパムではコルテスの敗北が語られている。後者にみられる歴史事実の反転に Wachtel はメシアニズムに向かう想像力を指摘している [WACHTEL 1977: 48-58]。しかし、Bode や Warman の研究をみると [BODE 1961; WARMAN 1972]、クイラパム型のコンキスタのダンスは非常にまれな例で、他に同じような例がないので、Wachtel が特異な例に頼りすぎている、という感じを私は抱いている。

征服をテーマにしたダンスはミへの村にも多くみられる。ネグリートス、クバーノス、サンティアゴ、コロキオス、コンキスタがあるが、この内、物語性のあるものはコロキオスとコンキスタのみである。コロキオスはトラウィで1974年に久々に演じられたが、先生役の者が台詞を忘れてしまって、マリンチェ役の少女はグェダルーペへの賛歌以外に台詞を教えられていない。コンキスタのダンスはミストラン、ヤコーチ、タマスラパム村でみられるが、いずれにしても台詞がなく、役柄も簡単で兵士と旗手しか出てこない。ミストラン村のマリンチェのダンスにも兵士とマリンチェが出てくるだけである。つまり、高地ミへでのコンキスタのダンスには物語性が乏しく、台詞もないのである。

中部ミへにいくとコンキスタのダンスは台詞がついてくる。アロテペック村にも台詞があると聞いた。1973年当時フキーラ村の神父であった Octavio Vilches 氏が収集されたサン・ペドロ・オコテペック村のコンキスタの台詞のコピーをトラウィ村のサレジア会の人々の好意により私は入手することができた。どういう経緯からか、記録の日付が1959年10月7日となっている。ダンスの台詞をみると、モンテスマ、マリンチェ、兵士、勅使 (Teotil)、サグアピラ (ドニャ・マリアのこと)、天文学士、コルテス、アルバラードが登場する。物語をみると、Wachtel の区分でいうとヒコテペック型に当たり、征服を素直に受け入れることで結末がついている。クイラパム型の歴史事実の反転はみられない。

ダンスにしても、復活祭にしても、ミへは征服文化の忠実な継承者であって、自らの文化の力によって編集したり変形したことはなかった。オコテペックのコンキスタのダンスも宣教師のもちこんだモデルを忠実に再生したものであって、ミへの側からの変形はなく、歴史への想像力はみられない。

2. 文化英雄を通じて

ミへの歴史への発言をかいまみる手だてでは文化英雄コンドイ (Rey Kondoy) にしかならないのではないか。文化英雄を鍵として、おぼろげな族としての意識に接近することはできないだろうか。再度フィールドに出かけても、コンドイについて得られる資料は少ないと思えるので、今、断片的な資料でも集めて、上記の問題を考えてみよう。

コンドイの出生物語は Miller の *Cuentos Mixes* の 6 番目の物語に収録されているカモトラン村の民話である。コンドイは洞穴においてあった二つの卵の内の一つから出生し、他方の卵からは蛇が出生した。コンドイは放浪生活の末に、部下と共にセンポアルテペトゥル山に入った、とされている [MILLER 1956: 105-106]。今でも、コンドイはセンポアルテペトゥル山の王ということになっており、供犠を捧げる神格の一つにもなっている。供犠をおこなう時、鳥の頭と足を供物に置いていくが、足を置いていく理由として、コンドイが鳥のような足をしていたから、という風に説明される。このように、洞穴（出生地、供犠の場）、卵（出生、供物）、足（身体の一部、供物）、センポアルテペトゥル山（住居、供犠のセンター）、といったコンドイにまつわる要素は供犠複合の支配的シンボルとなっており、コンドイがミへ固有の宗教、つまり供犠の伝統に支えられた文化英雄であることがわかる。

平地サポテカの町ミトラからみて、北はベラクルス、南はフチタンにまでわたる広大なミへの領地を守る文化英雄がコンドイといえるが、コンドイの住処がセンポアルテペトゥル山にあること、中部ミへに行くときマリンチェ山が重要な山となり、人々のコンドイへの知識も減ることから、コンドイのイメージの強い磁場はセンポアルテペトゥル山のみもとに広がるミへ高地ではないか、と私は考えている。

さて、コンドイとミへの歴史はどのように関連しているであろうか。Miller の同じ物語に、コンドイがモンテスマと戦って、ミへがアステカ軍に対して勝利をおさめる、という民話下記のようにある（スペイン語はミへ風である）。

サンタ・クルスの向こうのトラピッチェに通じる道で、コンドイはモンテスマという王と戦った。…

コンドイはトラピッチェの近くにいた。しかし、モンテスマの兵士はもっと上

の方にいた。サン・イシドロの近くに居た。何万もいた。あー、コンドイは独りきりだった。

すわ、モンテスマの兵は弾丸を撃ちだした。

コンドイは大きな石をつかんだ。石を投げつけようとしたのだ。石がおちれば、たくさん死んでくれるだろう。こうして、長い間戦っていた。三日も続いただろうか。でも、コンドイには何も起らなかった。モンテスマの弾丸など、ものともしなかった。何も起らなかった。弾丸は地上に落ちてしまった。今でも、あそこらの道にいくと石が見えるよ。拾い上げたことがあるだろう。一方、コンドイが石を投げつけると、モンテスマの兵士が大勢死んでいったのだ。かわいそうに、どうして耐えられようか。そして、死んでしまったのさ。その石はまだ今でも残っているよ。半レグア以上も石だらけの所があるだろう。

こうして、モンテスマはメキシコに戻っていった。これで終わったのだ。村の古老はそうのように語っているよ [MILLER 1956: 106-107]。

アステカ軍がミへの山岳地に侵入したという事実はないが、上記の民話では、モンテスマはコンドイに敗北し、メキシコに帰ったことになっている。コルテスがカルロス5世に書き送ったように、ミへのファンタジーに出てくる自画像は無敵のミへの姿である。

次に、スペイン人にミへはどのような反応をしめしたか。ヤコーチ村では、昔、スペイン軍が侵入してきた時、コンドイがセンポアルテペトゥル山から出てきて、石を投げつけ、打ちまかした、という話を何回もきかされた。スペイン軍がヴィリャ・アルタからトントベック付近まで進出したという記録はあるが、ヤコーチまで来たという記録はない。そうか、そうでなかったかをたしかめる手だてもない。しかし、ヤコーチ村では上記のような民話が残っている。

さて、昔も今も、経済的にミへを牛耳るサポテカ族に対して、コンドイはどのように動くことになるのかをみてみよう。下記は L. Ballesteros 氏の好意により入手できたトラウィ村の民話であり、語り手は同村の古老である。

昔、トラウィには桑畑があった。蚕をどこに売ってよいのやら、いくらで売ってよいのやらわからなくて、適当に売っていた。ある日、サポテカの商人がきて、ミへの無知をよいことにして、蚕を全部、全部言い値で買い取ろうとした。サポテカ族は力づくで買い占めようとしたので、村の人々は怒った。いかりくった人々はサポテカ族をつかまえて、棒にくくって、牢におちこんだ。不憫に思った一人の老人が村役人にとりなして、サポテカ族を牢から出してやった。皆、

生命からがらトラウィから去っていった。

逃げたサポテカ族は事の次第を州庁に訴え、兵をさしむけるよう要請した。これを聞き知り、トラウィの人は村から逃げ出し、村は死んだように静かになった。独りだけ老人が取り残され、死を覚悟していた。突如として、空から声がきこえた。「トラウィは決して滅びない。起きて、タマスラパム村を見よ。そこに、軍勢が居るから、トラウィに近づくな、と言え」と語った。老人は決心して、タマスラパムまでいった。たしかに、そこに兵隊が大勢いた。驚いたことに、隊長はトラウィを幼い時去ったミへの若者であった。

隊長は叫んだ。「おじいさん。何故こんなことになったのだ。トラウィは良識のある村であるのに、こんな事件にまきこまれてしまうとは。村に戻って告げよ。兵を入れるが責任者しか罰しないから、と。それに、食糧を用意してくれ」と。老人は承諾して、命令どおりに動いた。兵隊が近づき、川辺まで寄ってきた時、センポアルテペトゥル山の上に雲がまきおこった。部隊が坂を登りだすと、一天にわかにかき曇り、雹が降ってきた。石のように大きな雹が落ちてきた。兵隊は逃げるより手がなく、二度と帰ってこなかった。こうして、ミへの王、コンドイの言ったことは実証された。

語り手、トラウィの老人

訳者、 Ray Pérez

収集者、 L. Ballesteros 氏

(一部、黒田が短縮)

この民話の内容の一々細かい点には疑問があるが、ミへの救済者、コンドイの出現がきわめて印象的に語られている点が面白い。サポテカの経済力に押えつけられているミへの生活の現実を思うと、この民話の語り口の迫力がよく理解できる。

さて、1970年代になって、メキシコ政府との接触が本格的に始まった現在、ミへは他者をどのようにみているのだろうか。1974年、道路工事が進んで、トラウィにまで道が開けるのも近かった。ダイナマイトの音は日々続き、地すべり、崖くずれが毎日のおきた。トラクターの運転手や旅人が何人か犠牲になった。こんな事実を見て古老達は、「コンドイはセンポアルテペトゥル山に住んでいて、住処を荒されるので怒っている。だから、こんな災難がおこったのだ」と語った。コンドイの勝利を語るには、現実はあまりにも酷薄であり、また、現実から逃避せねばならぬほどには苛酷ではない。彼等は、上記の表現を借りて情勢判断を待っていることを示しているのではなかろうか。

IV. おわりに

ミへは恒常的にサポテカの下位に立ち、歴史的にも、アステカ、植民地政府、次いで、メキシコ政府の支配圏に一応入ったが、それは支配者側からみた解釈である。ミへには自らの歴史文書もなく、征服のダンスの台詞に民族の意識が反映されてもいない。しかし、ミへの文化英雄コンドイの物語や他の民話には、ミへの歴史意識が姿を現わし、現実の歴史は反転して描かれている。サポテカ族、アステカ軍、スペイン軍はどれもミへの前に敗走することとなっている。1960年代から加速度的に強まったメキシコ化に対して、ミへ自身は後年どんな解釈を下すのであろうか。現在、教育を受けつつあるミへの青年が自己の民族の位置づけに目覚める時、彼等はコンドイに替ってミへの歴史を書くことになるだろう。

謝辞

サン・ベドロ・オコテペックの征服のダンスの台詞は、元フキーラの神父 O. Vilches 氏により収集されたものときいているが、同氏は現在、チナンテカ地域の奥地に在任中のため連絡がとれず、トラウイのサレジャ会の人々がかわりに台詞の写しを送って下さった。遠路はるばると私のミへ研究を支援して下さいる P. L. Ballesteros と Sor Marta Garzafox をはじめとする宣教師の方々に深く感謝いたします。

文 献

Archivo General de la Nación, Secretaría de Gobernación

- 1973 Documentos que se encuentran en las fojas 247 a 349 del Libro Intitulado "Cuadros Sinópticos de Pueblos, Haciendas y Ranchos del Estado de Oaxaca" por Manuel Martínez Gracida. Copia Certificada de Documentos Relativos a los Pueblos de Tlahuitoltepec, Ayutla, Tepuxtepec, Tepantlali y Tamazulapam, del Estado de Oaxaca. Expedida a Solicitud de los Representantes Comunales de Dichos Pueblos, Feb. 16, 1973 (7 fojas en total).

ARROYO, Fray Esteban

- 1961 *Los Dominicos: Forjadores de la Civilización Oaxaqueña, Tomo II Los Conventos*. Oaxaca,

BEALS, Ralph L.

- 1945 *The Ethnology of the Western Mixe*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 42(1): 1-139.

BODE, Barbara

- 1961 *The Dance of the Conquest of Guatemala*. Middle American Research Institute Publications 11.

CÓRTEZ, Hernán

- 1971 *Cartas de Relación*. México, Porrúa.

DE LAMEIRAS, Brigitte B.

- 1974 *Indios de México y Viajeros, Siglo XIX*. México, Sep/Setentas 74.

- DE QUINTANA, Fray Agustín
1732 *Confessionario en Lengua Mixe, con una Construcción de las Oraciones de la Doctrina Christiana, y un Compendio de Voces Mixes, para enseñarse a pronunciar la Lengua.* (copy obtained at the parish house of Tlahuitoltepec).
- GUILLLOW, Eulogio Z.
1889 *Apuntes Históricos.* México, Imprenta del Sagrado Corazón de Jesús.
- JONES, Grant
1977 *Anthropology and History in Yucatan.* Austin, University of Texas Press.
- KEARNEY, Michael
1972 *The Winds of Ixtepeji.* New York, Holt, Rinehart and Winston.
- KURODA, Etsuko
1976 Apuntes sobre la Historia de los Mixes de la Zona Alta, Oaxaca, México. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 1(2): 344-356.
- LAVIADA, Iñigo
1978 *Los Caciques de la Sierra,* México, Editorial Jus.
- LEÓN-PORTILLA, Miguel
1964 *El Reverso de la Conquista.* México, Joaquín Mortíz.
- MILLER, W. S.
1956 *Cuentos Mixes.* México, Instituto Nacional Indigenista, Biblioteca de Folklore Indígena 2.
- MIRANDA, José
1972 *Vida Colonial y Albores de la Independencia.* México, Sep/Setentas 56.
- MÖRNER, Magnus
1973 *Estado, Razas y Cambio Social en la Hispanoamérica Colonial.* México, Sep/Setentas 128.
- MOTOLINÍA
1969 *Historia de los Indios de la Nueva España.* México, Porrúa.
- NADER, Laura
1969 The Zapotec of Oaxaca. In Wauchope and Vogt (ed.) *Handbook of Middle American Indians* Vol. 7: 329-359.
- POZAZ, Ricardo.
1952 *Juan Pérez Jolote.* México, Fondo de Cultura Económica.
- TAYLOR, W. B.
1972 *Landlord and Peasant in Colonial Oaxaca.* Stanford, Stanford University Press.
- TLAHUITOLTEPEC, Parish house
1825-49 *Libro de Cordilleras* (with *Libro de Bautismos de Chichicaxtepec* 1824-1872).
- WACHTEL, Nathan
1977 *The Vision of the Vanquished: The Spanish Conquest of Peru through Indian Eyes 1530-1570.* Sussex, Harvester Press.
- WARMAN, Arturo
1972 *La Danza de Moros y Cristianos.* México, Sep/Setentas 46.